

## 女性への暴力を可視化する

梶村道子(ベルリン・女の会)

あらゆる女性への暴力に抗する  
マニフェスト

「ボン女性ミュージアム」の庭に置かれた像。  
アンドレア・クライベ制作。© Bettina Bab

女性ゆえに被る暴力をテーマにした3つのアートが、最近ドイツで公開されました。

2020年3月8日の国際女性デーに、ボン市にある「女性ミュージアム」の庭に一体のブロンズ像が据えられました。像は、性的暴力を受け、我が身を守ろうと、この生存の危機から逃れて一步を踏み出す女性を表しているといえます。台座にはいくつかの手型が押されており、身体への攻撃であれ、キーボードを通してで

あれ、性的暴力には手が使われることを示しているようです。

実は同館には、2018年にキム・ソギョン、キム・ウンソン夫妻の「平和の碑」が設置される計画でした。それが頓挫した経緯は報告しましたが(『wam』よりvol.41参照)、今回あらためて同館キュレーターのバープさんから「ある種の脅迫、すくなくとも半ば脅迫」とも言える事情を聞きました。2017年に在独韓国系団体から「平和の碑」の展示の提案があり、同館はその主旨に賛同して快諾しました。しかし程なく在デュッセルドルフ日本総領事館からボン市長のもとに、碑を設置するならば日本政府は同市への日本企業進出を阻止するだろうと抗議が入り、多額の赤字を抱えて財政が逼迫していた市は、碑を展示させないと日本側に約束したといえます。同ミュージアムは民間組織ですが、その建物は当時は市の所有で、市は歳費節減のため売却を検討中でした。ミュージアムの存続には、碑を設置しないとの条件で提示された割安な譲渡額をのんで建物を買取るしかなかったと、バープさんは悔しがります。

その後、ある鋳造所がブロンズ像制作への全面協力を申し出て、「平和の碑」に代わる像を設置する道が開かれました。あらゆる戦争や危機における女性への暴力に抗し、すべての被害者を思い起こすものであること、それが、同ミュージアムがこの像を制作した意図だと、バー

プさんは言います。女性たちはあらゆる戦争において性暴力を受けてきたのであり、ナショナリティーを越えてこの事実とともに声をあげていけるならば、嬉しいと。

## 連帯の「赤いベンチ」

おなじ3月8日、ポツダム市の州立図書館に、青銅の女性像が座った赤いベンチが置かれました。ポツダム・ペルージア友好協会がポツダム市に寄贈したもので、姉妹都市であるイタリアのペルージア市の美術高等学校の先生と学生たちの作品です。裸像について、学生たちは議論の末、あらゆる束縛から解放された姿の象徴として相応しいと結論しました。しかしメンタルな、社会的・文化的な上部構造からの完全な解放にはなお遠く、胸を覆う金の布はそれらの束縛を示すそうです。

ベンチに像を組み合わせたこのアートは、女性への暴力の問題を人々に認識させる「赤いベンチ(Panchina Rossa)」キャンペーンの、ペルージア市バージョンです。本来の「赤いベンチ」は、名前のとおり赤いベンチだけを置くもので、2014年11月にイタリアのトリノ市で始まりました。パートナーや見知らぬ男性に命を奪われた女性たちを思い起こそうと、同市の6つの行政区とボランティア団体ACMOS協会が11の「赤いベンチ」を設けると、手軽でインパクトの大きいこの運動は間もなくイタリア各地に広がりました。ベンチを赤く塗ったり、アピールや絵をかいいたり、色以外は材質も形も多様で、置かれる場所も、公園、路傍、病院、大学とさまざまです。

イタリアでは、パートナーなどによる、時には殺害にまで至る女性への暴力が深刻な問題で、市と市民団体が共にこのキャンペーンに取り組む例がネット上でも多く見られます。キャンペーンの対象は女性だけではなく、男性メンバーが多いスポーツ団体に意図的に声をかける都市もあります。「女性像の隣は空席です。対等な男性像がないのです。それが、私たちが現在直面する問題です」と、ポツダム・ペルージア友好協会のマラザニーニさん。



ポツダム州立図書館の「赤いベンチ」と女性像。イタリアの「赤いベンチ」には、緊急電話番号が記されたものもある。  
© Bernd Malazani



ポツダム市に続き、2020年12月にはフライブルク市、翌年2月にはシュパイヤー市に「赤いベンチ」が設けられました。シュパイヤー市もフライブルク市も、「ベンチに腰をかけて！」と市民に呼びかけています。それが、あなたは一人ではないと被害者に連帯の意思を伝える行為だと。

## 女性たちの運命を可視化したい

泡立ち、氷のように溶けて、いつか消え失せそうな3枚のガラス板の中に見えるのは、人影のようであり、萎れた花の輪郭のようでもあり、上下に走る亀裂の中ほどの暗い楕円は、女性の性器のようにも見えます。

ラーベンスブリュック女性強制収容所記念館

の敷地に置かれたこのガラスのアートは、ナチスが強制収容所の男性囚人の労働効率を上げるための褒賞として設けた買春施設に送り込まれ、性労働を強いられた女性たちを想起す「追悼の徴」です。女性たちはおもにラーベンスブリュック女性強制収容所から、10カ所の強制収容所買春施設に送られました。彼女らは売春婦とみなされたり、ユダヤ人や外国人強制労働者と関係を持ったために拘束された女性たちでした。この事実が明らかにされたのは1990年代前半。ドイツではナチズムの犯罪を解明し記録する作業が進み、大規模な追悼碑を作ろうとの議論も始まっていましたが、この女性たちは、強制収容所の囚人の間でもヒエラルキーの最下層におかれ、戦後も忘れられた存在でした。

ガラスのアートは、今年の4月、ラーベンスブリュック女性強制収容所解放76年記念のプログラムとして公開されました。「碑」ではなく「徴」と控えめに呼ばれるこのアートを建てたのは、公立の同記念館ではなく、ピーレフェルト市で活動する民間の小さな女性グループ、「ラーベンスブリュック・プロジェクト」です。このグループは、性労働を強いられた女性たちについてブーヘンヴァルト強制収容所記念館で調査をし、ピーレフェ



ラーベンスブリュック女性強制収容所記念館に建つ、性労働を強いられた女性たちの「追悼の徴」。カーリン・クレルとロスヴィータ・バクマイスター制作。QR-Codeを記念館の収容所買春施設の展示にリンクさせて情報提供する予定。  
© Kiyomi Ikenaga

ルト市での講演会や展示活動を経て、2003年以降はラーベンスブリュック女性強制収容所の解放記念日に花を供えて女性たちを追悼してきました。

その活動のなかで生まれた、女性たちが選抜され、連れ出された現場に、彼女らが想い出される機会を創り出したいという思いは、2019年の春、美術家たちをワークショップに招き、そのイメージを具現してくれるアーティストに出会って実現しました。碑文は「女性たちは性労働を強いられた」とのひと言のみ。「まず観る人がイメージを膨らませてほしい。私たちは彼らを誘導するつもりはなく、強制収容所や戦闘の渦中に投げ込まれた女性たちの運命を目に見えるようにしたいだけなのです」。

## もはや見過ごされることのないように

ボンでは性暴力に抗するマニフェストの像が生まれました。しかし、性暴力の被害者が、衣服を剥ぎ取られた像に、地域や時代など彼女らの属性を一切排除した裸像に、はたして共感を抱けるのか。懸念は残ります。「赤いベンチ」は、今や国境を越えてドイツでも共感と連帯を呼んでいる「平和の碑」を、どこか連想させます。けれども加害国の私たちは、共感と連帯を示せばそれで済むものではありません。

「ラーベンスブリュック・プロジェクト」の女性たちは、「この『追悼の徴』ができたことで、あの女性たちがやっと認められるように、少なくともこの場所では、彼女らとこのテーマが、もはや見過ごされることのないようにと、私たちは願っています」と言います。同じように長い沈黙ののち、1990年代の同時期に初めてその事実が明らかにされた、ナチスによる強制買春制度と日本軍性奴隷制。30年の長い時を要したとはいえ、前者は、歴史からふたたび消されることのないよう記録が整備され、被害者の体験と苦しみを可視化した「追悼の徴」ができました。一方、日本軍「慰安婦」の姿を視界から消すことに余念のない日本。日本政府の介入が「平和の碑」に共感を抱くドイツ人を困難な立場に追い込み、韓国系団体との間に葛藤をもたらしているのは、ボン市の事例のみではありません。「語る言葉がないー大声の沈黙」展で「平和の碑」を展示したドレスデン州立民俗博物館は、わずか一点のアートにこうも過敏になる日本政府の対応が理解しがたいと、困惑しています。

日本社会が、日本軍による性暴力犯罪を、その被害者の苦しみと名乗り出た勇気を、目に見える形にして想起す一現状ではあまりにも非現実的な想定です。それでも「もし」が可能なら、「もはや見過ごされることのないように」とは、まさに日本のための言葉であるように思うのです。